座　談　会

【座談会進行】

鹿児島純心女子大学教授	八田 玲子　氏

【座談会出席】

肝付町「いったんもめんと結いの会」会長	坂口 喜作　氏
肝付町生活支援コーディネーター	冨満 千津美 氏
曽於市「皆来館」スタッフ	池田 真由美 氏
曽於市社会福祉協議会	冨田 ゆかり 氏
曽於市地域包括支援センター	宮脇 ゆかり 氏
鹿児島医療生協　理事	松浦 真由美 氏
介護部長	東　香代子 氏

【司会】　先ほどご報告いただいた３団体のお取り組みを深めていきたいということで、当初の予定を変更して座談会にいたします。報告者は登壇をお願いします。

当初の計画では会場の皆様との意見交換の時間に当てたいとしておりましたが、時間が不足するのではないかということから、限られた時間を有効に使って深めたいと思います。講演いただいた八田先生に進行していただきながら、各報告者への質問を出していただくことによってより掘り下げた話をお聞きできればと思っております。

なお、会場の皆様からのご質問等に関しましてはアンケートにご記入ください。この後、県生協連のホームページに開示したいと思いますので、ぜひご協力をお願いします。

それでは、これからの座談会の進行は八田先生にお願いします。どうぞよろしくお願いします。

【座談会進行　八田教授】

発表者の皆様､ほんとうにご苦労さまでした。

いつもシンポジウムになると発表者の方々の時間が延びてどうしても意見交換の時間が少なくなることを想定して、今、司会進行のほうで言っていただいたみたいに座談会形式で進めていこうということにしておりましが、報告者みなさんの協力で時間どおりに進行しております。想定より10分ほど余裕のある状況です。予定にはありませんが会場の皆さん方のほうから質疑はございませんか。

とりあえず座談会形式で進めまして、後ほど時間があるときは、ご発言があればよろしくお願いいたします。

どの発表もすばらしかったですね。私、地域共生社会のこれからの地域づくりの方向性のスライドを１枚、最後にご説明いたしましたが、国の施策とかではなくて、そんな方向で地域づくりが進んでいるという非常にうれしい報告だ

ったような気がしております。

昨年の学習交流会では、　今ここに登壇されています曽於市地域包括支援センターの保健師の宮脇さんと、曽於市社協、それから事業所の方が曽於市で連携を始めて、ちょっと苦しみながらも今、活動されているという状況報告を行っていただきました。その成果をこの「皆来館」という形で今日発信していただきました。

この「皆来館」は私たちも県の介護予防の推進委員会で視察に行きました。そのときに地域の方がほんとうに生き生きと活動されておられるのを拝見しました。

私たちはこの「皆来館」、高齢者の居場所づくり的なイメージでお聞きしていたんですけれども、先ほどの報告では、地域のマップの課題から、子育てをしている人たちが非常に困っているということで、結果として今、子育ての児童クラブふれ愛活動やふれ愛子育てサロンを取り入れておられます。

この子育て支援に取り組む際の課題であったり手応えであったりといったことについて、参加している方々、スタッフの生の声とかをよかったらご紹介ください。

【曽於市社協　冨田】

先程ありましたように、地域には新興住宅があることから、子供さんのいらっしゃる若い世帯がほんとうに多いんです。で、マップづくりをした中で、民生委員さんから、子育てに関するいろいろな課題もありますよというお話をお聞きし、何かできないかなとスタッフともお話をして、ではまず子育てのサロンを開いたらどうだろうかということで、柳迫地区には助産師の資格を持った住民の方がいらっしゃいましたので、その方の協力と、あと、児童クラブの先生にちょっとお願いをしまして、月１回ですけれども始めさせていただきました。

最初は少なかったのですけれども、徐々に広がっていきまして、柳迫地区以外からも来ていただけるようになったところです。月１回ではありますけれども、やはり専門職の助産師の方にかかわっていただいている関係でいろいろな悩みを抱えていらっしゃるお母様方がいらっしゃって、ほんとうに細かい相談とかもされている感じです。

あと、一応、多世代の拠点になっておりますので、子育てのサロンと知らずに来られる地域の高齢者の方もいらっしゃいます。帰られるのではなくて、「ほんと久しぶりに赤ちゃんをだっこした」とか、そこで赤ちゃんを見ていただいて、お母さんはおっぱい相談をしたりとか、お母さん同士でちょっとゆっくりお話ししたりとか、そういった場にもなっている感じです。

あと、児童クラブの子供たちにも利用をしてもらっています。学校の敷地内にあるんですが、限られた中での活動で月２回、２時間弱ぐらいになっていますけれども、この「皆来館」に歩いてきます。そこでスタッフさんを中心に、地域の高齢者の方も先生となっていろいろな活動をして、今、それがすごく定着しています。

【進行　八田教授】

多世代の交流といってもやっぱりうまくいくときといかないときがあるという気もするんですけれども、課題について感じていらっしゃいませんか。困ったことみたいなのはありますか。

【皆来館スタッフ　池田】

私は子育てサロンと児童クラブふれ愛活動のほうはスタッフとしてかかわりを持っていますが、今、実際に私が活動している中では課題というのはあまり見えていません。

子育て中のお母さん方は、来られるのを非常に楽しみにされています。初めてのお母さんもいらっしゃれば３人、４人、５人と子育てをされた方もいらっしゃいます。先輩のお母様方の意見を聞いたり、実際、私たちとよりも今子育て中のお母さん同士での会話が弾んでとても参考になったと喜んでくださいます。利用されて

いる方は、もしかしたら「こうあってほしいな」とか「もっとこういう活動をしてほしいな」という要望が実際はあるのかもしれませんが、今のところはお母様方からも「とても、ありがたい」、「うれしい」という言葉をいただいているところです。

【進行　八田教授】

子育て中のお母さんたちが、この児童クラブに非常に喜んでおられる。そこに時々は、高齢者の方も自然に入って赤ちゃんをだっこしているみたいな、そんな絵（写真）が浮かぶような活動になっていると思います。

次に「いったんもめんと結いの会」のほうにお伺いしたいのですけれども、ここもやっぱりいろいろと地域課題から――地域住民の力をほんとうに感じるモデルだなと思って聞いていました。

まずは、この地域通貨的なお食事券はすばらしい発想ですね。これからの地域包括ケアは、自分たちができることを増やしていく、「セルフケア力」を活用しながら地域づくりをしていくというような方向性が一番重要ということを、いろいろな報告書とか学識の方が言っていらっしゃいます。いわゆる地域通貨みたいなものができているような気がしますが、この食事券の発想、どんなふうにして生まれたのかとか、それをどんなふうに行政とか社協がサポートされてきたのか、その経緯をちょっと教えてください。

【肝付町生活支援コーディネーター　冨満】

「おかずおすそわけ事業」を始めたいという語り合いをずっとしてきました。その話し合いの場に来られている皆さんも、「うちも野菜を提供するし、『おすそわけ』だから当然、お金なんて取れないよ」という意見が最初は強かったです。ただ、でも、「頼みやすいほどよいところはどこかな」という意見がありました。また１年間の整備事業のときの補助金は３月まではいただいたんですけれども、今年の４月からは助成金は一切いただいていない形で、行政とか社協とかの補助金を使わない形で何ができるかといういろいろな情報を提供をした中で、それこそ、みんなは「ボランティアをしたい」、「いただきたくない」という思いがすごく強かったんですけれども、「したい」という思いのあるときはそれが続くと思うんですが、それが長く続けられる方法は何かなというところで、「やっぱりちょっとお金を渡せるとお弁当を頼みやすい」、「じゃあ、どのぐらいの金額かな」とか、『いったんもめんと結いの会』の皆さんが無理なく長く続けていけ、なおかつ自分たちができそうな方向性というような話し合いをいっぱい重ねて、最終的に、まずチケットを購入していただく、届いたときにそのチケットを渡すという形になっていったというのがあります。

あと、看板を作ってくださったおじちゃまたちもなんですけれども、元気な高齢者の方が多いので、その方たちが「『いったんもめんと結いの会』には行けないけど協力はしたい、その方法は何かないかな」という意見もあって、「お野菜を提供いただいたら『ありがとう券』を渡すというお互いさまの形ができたらいいよね」という意見も話し合いの中でアイデアとして出てきて、じゃあチャレンジでやって、無理だと思ったらやめようねという形ですけれども、実際、それが続いているという状況です。

【進行　八田教授】

ありがとうございます。すばらしいアイデアですね。今、コーディネーターの方は、提案して、それを地域の方々が自分たちで選択していかれたと。会長さん、もめませんでしたか。本音のところで「実はな……」というようなことはなかったでしょうか。

【いったんもめんと結いの会　坂口】

何かしたいという気持ちが強い人が多かったものですから、「そういう方法があるよ」と聞い

て、「まあ、じゃあそれをやってみようか」ということでわりとスムーズにみんなの意見がぱっとまとまったところはありますね。「１回きりじゃないわけだから、長く続けるにはどうしたらいいかということを考えるとそういう方法がすんなりいくのかな」ということで、「とりあえずやってみようか」ということが前提になりますね。

【進行　八田教授】

ありがとうございます。ちょっと考えて、今から、とりあえずやってみようか、だめだったら次の方法を考えればいいよねみたいな、そういうプロセスがすごく地域づくりに必要な発想ですね。

これまでも「このボランティア活動は有償なのか無償なのか？　本来、ボランティア活動なんて無償だから、これにお金をつけるようなことをしたら崩れる」みたいな意見も実際にありました。だけど、思いがすごくあふれているときはその思いでいけるけれども、地域も高齢化していくので、活動する人がだんだん少なくなっていったりしたときに、ちょっとでも長く続ける方法という意味では、やっぱり何らかこういう――アイデアと工夫の成果みたいなのをすごく感じられて、聞いていてちょっとおもしろいですね。これもまた、どこかの方法を持ってくるんじゃなくて、その地域の最適を見つけていくというところでは非常にこれからの参考になるかなと思いました。ありがとうございます。

では、生協の報告はどうでしょう、皆さん。医療生協、生活協同組合コープかごしま、私も組合員証を持っていますけれども、こういう活動をされているということをご存じでしたでしょうか。

私、この「おたがいさま」活動とかの生協の活動は、いろいろな報告とかでちょっと読んだことはあったんですけれども、このような形でしっかり聞いたのは実は今回が初めてです。地域包括ケア、介護保険制度の『介護保険白書』というのが出されまして、その中でこの生協活動の推進母体の方が一緒に対談をされているのを読んだことがありまして、生協の活動って全国的にすごく活発にされているところがあるんだなと思っていましたら、鹿児島も負けていなかったです。

先ほど報告いただいた中で、一つの事例からということが地域づくりの中で大事な視点だということで最後のシートに出てきていましたが、これだけの事例を報告いただいたんですが、例えば組合員さんとか職員の方がこういう事例を共有される機会、それを共有した後に皆さんのモチベーションというか、喜びとかやりがい、そういうところにつながっているとかを教えていただければと思います。

【医療生協　松浦】

「おたがいさま」の活動がスタートしてまだ間もないんですけれども、組合員さんとか職員の皆さんには「おたがいさまニュース」を毎月発行させていただいています。あと、「医療生協だより」というものを発行していますけれども、そちらで組合員さんにお知らせしたりで、今はまだ「ほんと困った」を相談してくださいという状況です。

今日、事例をさせていただきましたが、その中の一つの70歳の独居の女性の方なんですが、この方は外科を受診されているときに、今日は元気がないなということで「元気がないんじゃない？　大丈夫？」と看護師さんがお声かけをされたら、「うーん……」という感じのお返事だったんですね。それでくらしコーディネーターさんに相談をし、その方のところに直接訪問されてお話を聞いたそうです。お話の中で世話好きだというのがわかりまして、少し物忘れも多くなっていらっしゃったのですけれども、同じ施設でボランティアをできないだろうかというのでデイサービスにご相談して、それがきっかけで現在、お世話をするボランティアをされているそうです。

ところが、先ほどセルフケアとかありましたけれども、お茶を入れてくださいということでお願いしましたが、普通にしていることですけれども、お茶の葉を入れて、お湯を入れて、それを急須からお湯飲みに注ぐ、この動作ができなかったそうなんですね。それで、これは難しいということで本人も自分の体のことを知ることができて、自分のできることは何だろうか、「お茶を入れるのは難しいけれどもお茶わんは洗うことができます」ということで、今も積極的にお茶わんを洗ったり、あと、少し認知症が進んでいらっしゃる利用者の方々とお話をしてくださったり、自分にできることで今、そこのボランティアでお仕事をされていらっしゃるということでした。

【医療生協　東】

私たちは医療と介護の事業所で、たくさん専門家がおります。人生の節目で考えると、入院をしたりとか、外来に通院したりとかいうのはすごく助けが必要な状況が出てくるんですね。そのタイミングで私たちはそういう困った状態の人を発見しやすいというのはあるんですね。例えば、退院するときに、家に帰りたいけど帰れないんですよねというこの独居の要介護５の男性の人とかですね。この外来の看護師さんが声をかけてくれた人も、このまま気づかなければ閉じこもり状態だった事例なんですね。そういう人たちを私たちは身近に発見する立場に常にあるわけなんです。だから、私たち職員が、医療、介護だけじゃなくて「生活のお困り事は何かないですか」と一言声をかければ、そういう相談がたくさん出てくると思うんですね。

だけど、皆さんも病院や介護事業者は医療と介護だけの相談だと思っていらっしゃるし、私たち職員もそういう意味では積極的に声をかけていないという状況がありますので、病気だけを見るんじゃなくて、そうやってその人の生活に思いをはせて、そういう助けの必要な人たちが地域で暮らせるように、組合員さんや地域と病院や介護事業所が協力してやっていくというのは、閉じこもり予防とか、寝たきり予防とか、また家で暮らせるということを保障していくというか、そういうことにすごくつながることだなと思って、職員みんながそういう声かけができるような事業所というのを目指してやっています。

また、組合員さんたちも、医療生協のバックアップがあることによっていろいろなボランティア活動を自分たちがやって、またその中で困ったことを医療生協のコーディネーターに相談ができるというような安心感、相談をする方も、組合員さんだけではなくて、医療生協の組合員さんでない方もいらっしゃるんですね。そういう意味では、医療生協の垣根を越えて、地域の民生委員さんとかいろいろな人たちとつながりながら一緒にこういう仕組みをつくっていけたらなと思っております。

【進行　八田教授】

ありがとうございました。地域にいろいろな専門家がいらっしゃる、地域資源という意味では非常に大きな力だと感じるところがあります。

今の生協の報告でもう一つお聞きしたいのが、サポーターの方が140名登録されていますけれども、どんな方々ですか。もし内訳がわかればお願いします。

【医療生協　松浦】

140名の方は、職員、それから運営委員さん。39支部ありますけれども、そちらに15名ぐらい運営委員さんがいらっしゃいます。その方々にくらしのサポーター養成講座を受講していただいて、そこで協力ができますよという了解を得られる方に今、登録をしていただいています。その方が（１８年）１月４日現在で140名です。その後もいろいろなところで講座をさせていただいているので、現在、200名を超える方に登録をしていただいています。

【進行　八田教授】

ありがとうございます。

今日は鹿児島市の住民の方も多数おいでだと思います。このような生協がある地域、そうじゃない地域、いろいろあろうかと思いますけれども、地域包括ケアを進めるときに、それぞれの地域でいろいろな形があると最初のころは考えていました。地域包括支援センターが介護保険制度の中でちょうど登場したので、ここが拠点的な意味で調整役とかコーディネーター役を期待されるところはあったんですけれども、このように、もともと老舗として地域福祉活動とかをされてきた、今まであった医療機関とかいろいろな介護施設、そういうところを一つの拠点とした地域の住民の方々と連携した取り組みというのは地域包括ケアシステムとして十分動いていけるんじゃないかなと考えていましたので、その一つのあり方として、今の医療生協のほうの取り組み、「おたがいさまシート」というような事例を今後どのように集約して発信していただけるか、非常に期待が大きいと思っていますので、また頑張っていただければと思います。

今、一巡しましたけれども、せっかくの機会ですので、特に聞いてみたいこととかは何かないでしょうか。

先ほど肝付町のほうは、いわゆる財源的なところは、４月から補助金はなくなって、その中でやっていくんだというようなことでしたけれども、ひょっとしたら答えにくいところがあるかもしれませんが、今の活動に関する財源とか、曽於市のこれから後の取り組む方向性みたいなのがあったら教えてください。

【曽於市地域包括支援センター　宮脇】

地域包括支援センターの宮脇といいます。よろしくお願いいたします。

財源の話をすれば、「皆来館」も29年度で３年間の補助金が終わります。３年前のスタートの時点から「３年後はなくなる、後はひとり立ちしていくんですよ」とずうっと住民さんには言い続けてきましたが、実は、ここのオープンに至るまではほんとうにいろいろありました。先が見えないというところと、住民さんに任せると言われても、どんなふうに――もともと活発的な地域ではあったんですが、それでもほんとうにいろいろなところに研修に行ったり、３歩ぐらい進んだなと思ったら５歩ぐらい下がってみたりというようなのを繰り返しながらのオープンだったのですが、今、いよいよ補助金がなくなるという段階です。一つの選択肢として共同募金とかそういったものもありますが、実は曽於市は総合事業のほうで住民主体型の訪問サービスというメニューをつくっております。今まで介護保険であったり介護保険外であったりというところで言うと、30分とか１時間が幾らというようなフォーマル、インフォーマルなサービスが皆さん方のところにもあると思うんですが、この住民主体型の訪問サービスは10分支援としております。

対象になる方はどんな方かというと、お薬を飲めたか飲めなかったかの確認がちょっとどうだったかというような方とか、それから、デイサービスの車が迎えに行ったら本人さんがいなかったとかで何回も迎えに行かないといけないというような事情のある方です。そこで、この柳迫地域で、その10分型サービスをやりませんかというお話をしています。もちろん、もともと支え合いのところは活発でしたが、先ほどから出ている継続というところと、毎日朝晩、服薬確認が必要な方もいらっしゃるかもしれないので、この10分は月で言うと60回とか、そういった回数になってきます。

この柳迫地域だからこそできるという内容の10分支援としていますので、今後、自主財源というところでは、そういった活動の一つの事業所になりませんかというところで今お声かけしています。その事業に参加するためには、先ほどサポーターのお話が出ましたが、生活支援サポーターの養成講座を受けないといけないので

す。そうすると、そのサポーターの講座を受講されている方が数名いらっしゃるので、準備ができたらいつでも始められるというような状態に今なっています。

あと、この柳迫地域は16自治会あるんですが、１個１個の自治会とみなさずに、16が一つの地域としてやはりみんなでと住民の皆さんが思っているというところがこれからいろいろな事業を進めるに当たってもすごく強みになるんじゃないかなと思っているところです。

【進行　八田教授】

ありがとうございました。

さっきから私は名簿を見ていたんですけれども、今日は皆来館の住民の方がたくさん来てくださっています。22名来ていらっしゃったんですね。住民の方々がこんなにしてまとまって視察に来ようかというところから、地域活動の輪がすごく広がっているような気がしておりました。

それで、いろいろなご苦労があるけれども、今の総合事業の中にこういう地域活動のいい面を乗っけていくというその辺を包括の保健師である宮脇さんたちが仕掛けていかれているみたいなので、これがこれからうまく定着することをほんとうに願っています。

あと、「いったんもめんと結いの会」のほうにもう一つお聞きしたいのですけれども、会長さん、「いったんもめん」のふるさとということで、地域の文化とか、守りたいものがすごくあるような、いいところを学生さんと見つけていったら自分たちが忘れていたようなことがまたわかったりとかというお話がありました。そういう意味で今の「いったんもめんと結いの会」で一番大事にしていきたいもの、そんなのはどうでしょうか。少し抽象的な質問で恐縮なんですけれども。

【いったんもめんと結いの会　坂口】

私たち男性陣は地元になりますが、嫁さんたちはよそから来た人になるわけですね。私たちも初めて若い人たち会ってみて再認識したところがあったのですけれども、自分たちのいいところを発信する方法が何か見つけられればいいがなと思っているのが今のところですね。

【進行　八田教授】

そうですね、ほんとうにそれぞれの地域にすばらしいところがあるので、それをどんなふうに発信したら皆さんにまたそれが伝わるかというのがこれからまたすごく大事になるんじゃないかなと思いました。

最後に、あと10分ぐらいになりましたけれども、それぞれの今の活動の強み、ちょっとここ辺が弱いからもう少しこの辺を強化したいなというところを一言ずつご紹介いただいて終わりたいと思います。

では、生協のほうからちょっとお話しいただけませんでしょうか。

【医療生協　松浦】

私たちの「おたがいさま」活動はフレイル予防にもつながると先ほどお話ししたのですけれども、今、フレイル（高齢になって筋力、活力が衰え、健康な状態と要介護状態の真ん中の状態のこと）の学習をしたり、健康長寿の三つの柱「栄養・運動・社会参加」でフレイル予防にも取り組んでいます。この社会参加は医療生協の活動でいろいろな困ったを聞くことにつながったり、また、地域の方々にいろいろな医療生協活動に参加していただいて、生協活動ももちろんですけれども、地域の皆さんとつながったり、住みなれたまちで今後も自分らしく暮らしていけるように、医療生協としては少しでも地域の力になっていけたらなと思って今後も活動していきます。

【進行　八田教授】

専門職の力とかをかりながら、高齢者の心理的フレイル（虚弱）、身体的フレイル、社会的フ

レイル、それからオーラルフレイル――フレイルのつくものがいっぱい出てきています――そういうところを少し強みとしながら、これから社会参加をまた広げていきたいというお話でした。

では、「いったんもめんと結いの会」のほうにお願いいたします。

【いったんもめんと結いの会　坂口】

私たちのこれは家を借りてやっている事業ですので、これを長く続けるにはやっぱりその地域に一番近いところの方々の協力が大事かと思いますから、地域の近い方々をいかにして引き込めるか、その辺も今後の課題かと思っています。

そしてまた、それはこの活動の中で評価してもらわなくちゃいけないわけですけれども、地域外からあそこに住んでみたいというような人が一人でも出てくれることを願っております。

【進行　八田教授】

ありがとうございます。近いところの人たちが力を合わせて、あの写真に出てきていた19名ですか、昔、ガールズの、エプロンをかけたような、ああいう方々が非常に力になっておられるかと思いますけれども、あそこに住んでみたいという地域になる可能性をとても感じました。世帯が増えてくる、そういうところが会長がおっしゃるようなところまで行けることをほんとうに期待しております。

最後に、曽於市のほうはいかがでしょうか。

【曽於市　宮脇】

今後に向けてといいますと、先ほどの自主財源のこともあるんですが、30年度からは金額的なところはないのですけれども、行政の役割としては、やはり今後、それこそ不安だったり戸惑いであったりというのは必ずあると思うので、継続というところで言うと、後方支援ができるといいなと。

あと、皆来館の活動自体は活発ではあるんですが、皆来館自体は地域だけのものではありません。曽於市全体のものです。少しずつ地域外の方も集っていただけるようになっていますが、まだまだ周知というところで、もっと知ってもらって一緒に参加していただく方向になっていけばいいなと。

あと、新規の事業が「ぼちぼちサロン」も含めて五つ、ぼんと立ち上がったのですが、地域が16自治会という広いところですので、皆来館の場合は拠点としては大きい範囲になりますから、やっぱりサロンのところも必要だし、あと、サロンや皆来館へも来られない方、ＳＯＳを出せない人もまだ地域に埋もれているんじゃないかなと思うと、そこに集えない方への支援をどうするかというところで言うと、まだまだ行政、社協、あと地域住民さんが一体となってそこは取り組んでいかないといけないかなと思っております。

【進行　八田教授】

ありがとうございました。皆来館の活動が今、ほんとうに活発化していますけれども、そういう地域だけじゃなくて、まだまだ今からというところもあると。こういうように先駆的にほんとうに頑張っている地域のよさをぜひ全体に広めていけるような行政としての支援といいますか、そういうところは非常に大事です。今日来られているスタッフの皆様のやる気、思い、そういうところをまた元気に発揮していただけるような仕掛け、そういうことも必要かなと思って聞いておりました。

以上、ほんとうにすばらしい報告、それから、かなり中身の深いところでご議論いただきました。皆様方のほうからご質問をとる時間がなくなってしまいましたので、ご質問のある方はぜひアンケートのほうへお書きください。

今日、私のほうの話の中で、地域包括ケアは高齢者の分野からいろいろ進めてきました。それなりに改善を繰り返してきましたけれども、

これからは、今、３カ所が報告してくださったような、子供からお年寄りまで困ったと発信できる、その発信に対して自分たちで課題を整理し、やれることを考えて実行していく、そういう地域共生社会へ向かいます。このお三方の取り組みが私たち鹿児島県内でできているということが非常に地域の力だと思っています。今日お集まりの皆様方の地域でも負けないぐらいの活動が始まっているところがあるのではないかと思います。

この交流会はおそらくこういう形では今回までとなるかもしれませんが、元気な活動というのは外に発信していただいてこそまた深まっていくかと思いますので、今日は行政の渡邉対策監が見えていますから、またこういう機会をどこかで持てることを期待しまして、今日のこの交流会を終了させていただきます。

時間どおり運営できましたこと、発表者の方々、フロアの皆様方、ほんとうにご協力ありがとうございました。（拍手）